

東方無反録

霸王風神刃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世の記憶を取り戻した元一般人が東方の世界で生き残る話

目次

技・魔法	1
ステータス	12
転生	
一話	16
二話	22
三話	27
四話	32
五話	37
六話	41
七話	45
八話	49
九話	58
十話	61
十一話	68
十二話	74
十三話	76
十四話	81
十五話	85
十六話	89
十七話	92
十八話	97
十九話	102
二十話	106



技・魔法

獄炎【地獄の焰（インフェルノ）】

属性：火

魔力消費量：S

広範囲殲滅魔法

説明：全てを焼き尽くす、といってもおかしくない焰。その上、広範囲だから滅茶苦茶強い

強化【プロテクション】

属性：無

魔力消費量：E

補助魔法

説明：防御力を少しだけ上げる魔法。だが、魔力の最大量が高ければ高いほどこの魔法での強化値が上がる

魂喰【ソウルイーター】

属性：無

魔力消費量：A

単体殲滅魔法

説明：一時的に魂だけを喰らう龍を具現化させる。ただ、一定以上のダメージを受けると消える

獄炎【灼熱地獄】

属性：火

魔力消費量：B

広範囲殲滅魔法

説明：指定した空間を滅茶苦茶熱くする。

魔弾【追跡セシ地獄の焰】

属性：火

魔力消費量：A

単体殲滅魔法

説明：追尾型の魔法。滅茶苦茶強い

常闇【ノワール】

属性：闇

魔力消費量：S

拘束魔法

説明：対象に闇を纏わせ、拘束する。光が多い場所だと、効果が弱くなる

爆発【バースト】

属性：火

魔力消費量：C

単体殲滅魔法

説明：そこまで攻撃力が高くない爆発を起こす。攻撃用というよりは、対象を吹っ飛ばす

魔法

太陽【アストラル・サン】

属性：火

魔力消費量：S

中範囲殲滅魔法

説明：小さい太陽を生み出す。

無効【マジックキャンセル】

属性：無

魔力消費量：SSS

無効化魔法

説明：魔力を使い強引に無効化する。ただ、術がどういふものなのか理解していないといけない

悪火【デーモン・フレア】

属性：火

魔力消費量：A

単体殲滅魔法

説明：ビームみたいなもの。

風術【霸王風神刃】

属性：風

魔力消費量：A

神力消費量：E

単体殲滅魔法

説明：風の刃を生み出して、対象を切り裂く。

模範【現世斬】

属性：無

魔力消費量：D

単体殲滅魔法・補助魔法

説明：魔力と剣術で強引に発動させる。技自体は妖夢のやつと同じ

火盾【ファイアーシールド】

属性：火

魔力消費量：E

防御魔法

説明：火の盾を生み出して、攻撃を防ぐ。サイズは最小で大人の手の一つ分、最大サイズで月一個分のサイズ

模範【マスタースパーク】

属性：光

魔力消費量：A

単体殲滅魔法

説明：魔理沙のマスターズパークと同じ。火力はこっちの方が上だが

炎弾【バーニング・フレア】

属性：火

魔力消費量：A

単体殲滅魔法

説明：熱光線を撃つ。

異常【カオス】

属性：無

魔力消費量：B

状態異常系統魔法

説明：対象の全能力値を下げる（ー70%）

失墜【ダウンバースト】

属性：風

魔力消費量：A

広範囲殲滅魔法？

説明：風の塊を作り出すだけの魔法

雷光【電光石火】

属性：無

魔力消費量：C

補助魔法

説明：身体能力を強化する（主に素早さ）

異常【混沌世界（カオス・ワールド）】

属性：無

魔力消費量：A

広範囲殲滅魔法？

説明：対象の全能力値を下げる（－50％）

雷絶【フォース】

属性：雷

魔力消費量：A

強化魔法

説明：身体能力を強化する魔法。

雷弾【ライティングスナイプストーン】

属性：雷

魔力消費量：B

単体殲滅魔法・暗殺魔法

説明：この魔法は、遠距離の敵を倒すための魔法、最大射程距離は、500 km

冷光【フロストビーム】

属性：氷

魔力消費量：B

光線魔法・状態異常系統魔法

説明：殺傷力のない光線を撃つ。殺傷力がない代わりに、光線に当たると素早さが下がる

治癒【パーフェクト・ヒール】

属性：光

魔力消費量：SS

治癒魔法

説明：どんなにひどい傷、あるいは、体の一部の破損をなおしてしまおうすごい魔法。蘇生は不可能

拳技【破拳】

霊力消費量：SSS

妖力消費量：SSS

神力消費量：SSS

説明：拳に霊力、妖力、神力を合成した力を纏わせ、吹き飛ばす技。殺傷力は皆無。

剣技【隴飛燕】

妖力消費量：S

説明：偽物の剣筋を見せて、混乱させる技

魔炎【神々を追放せし魔の焰】

属性：火

魔力消費量：EX

神力消費量：EX

広範囲殲滅魔法・単体殲滅魔法

説明：森羅万象を燃やし尽くすと、言われている炎。

反盾【カウンター・マジック・シールド】

属性：無

魔力消費量：EX

防御魔法

説明：魔法を反射する盾を創造する魔法。一定時間経つと消滅する

神術【神力障壁】

属性：無

神力消費量：B→A

防御魔法

説明：敵対者からの攻撃を防ぐための魔法。神力を込める量によって耐久力が変わる

強化【エンハンス】

属性：無

魔力消費量：B
強化魔法

説明：身体能力を強化する魔法

魔力【魔力障壁】

属性：無

魔力消費量：C

防御魔法

説明：神力障壁の下位互換。術を組み上げるのはこっちの方が簡単

魔装【バハムート】

属性：無

魔力消費量：SS

強化魔法

説明：身体能力を強化する魔法

黒魂【ダークソウル】

属性：闇

魔力消費量：EX

即死魔法

説明：対象の魂を削除出来る

魔導砲【マスターブラスト】

属性：闇・雷

魔力消費量：A

砲撃魔法

説明：ビームを撃つ

剣技・霊剣術・【霊空斬】

霊力消費量：SSS

説明：空間さえも切り裂く一撃を出せる。近接用。

空斬【ダイメンション・スラスト】

属性：無

魔力消費量：SSS

説明：【霊空斬】の魔法バージョン。

剣術・応用・【縮地】

説明：対象が目を一瞬つぶった瞬間加速して接近するだけの応用術。

霊術【霊壁】

霊力消費量：C

説明：魔力障壁の霊力版。

霊術【霊力解放】

霊力消費量：0

説明：霊力解放は一気に霊力を解放して、力の波で吹き飛ばす技。霊力解放は吹き飛ばすだけでなく、霊力関係の技なども強化できま
す。それと、身体能力も若干強化される

衝撃【ショック・ウェーブ】

霊力消費量：C

説明：衝撃の波を生み出して、対象を吹き飛ばす。

剣術・霊剣術・【回転斬り】

霊力消費量：A

説明：回転切りの霊剣術バージョン。空中でのみ使用可能。

風の導き手【ウイスパー・ハンド】

属性：風

魔力消費量：A

説明：魔法で生み出された風の手で対象を押し潰す魔法

破壊【デストロイヤー】

属性：無

妖力消費量：SSS

説明：魔法を破壊する特殊な術。

風纏【テンペスト】

属性：風

魔力消費量：S

説明：ダンまちのアイズと同じ魔法

星爆発【スーパノヴァ】

属性：火

魔力消費量：SSS

説明：小規模の超新星爆発を発生させ辺り一面を超高熱ガスで覆う

創造【スペース・ワールド】

属性：無

神力消費量：ERROR

説明：無限に続く空間を創造する

光線【ナパーム】

属性：火

魔力消費量：SSS

説明：濃密ガス火炎を噴射し触れた者を焼く

風撃【ウインドブレス】

属性：風

魔力消費量：C

説明：風圧で相手を吹き飛ばす

超爆発【エクスペロージョン】

属性：火

魔力消費量：SSS

説明：大爆発させ、範囲内のものを吹き飛ばす。威力はとんでもないレベル。

妖術【妖力障壁】

妖力消費量：C

説明：魔力障壁の妖力バージョン

概念【強制削除】

属性：無

魔力消費量：EX

説明：森羅万象を削除出来る

熱光線【クリムゾン・ノート】

属性：火

魔力消費量：SS

説明：蒼い超高熱の炎で対象を焼く

白線【白色破壊光線】

属性：光

魔力消費量：SSS

説明：前方に光の力を収束し、両掌をかざして一気に放出し、光線のように一直線状の範囲のものを消滅させる

爆轟【デトネーション】

属性：火

魔力消費量：S

説明：大爆発を起こす

凍結【アブソリュート・ゼロ】

属性：氷

魔力消費量：SSS

説明：絶対零度のフィールドを作り出す

禁忌【ソロモン】

属性：無

神力消費量：ERROR

魔力消費量：ERROR

妖力消費量：ERROR

霊力消費量：ERROR

説明：最早次元を超えた魔法で、時空を歪ませ万物のあらゆる抵抗を無視して分子レベルで破壊する究極の攻撃魔法

妨害【術は発動できないぜ☆】

属性：無

魔力消費量：SSS

説明：魔法を発動できなくする特殊な波を出す

天雷【ヘブンズサンダー】

属性：光

魔力消費量：SSS

説明：天から一筋の雷光を落とす

ステータス

主人公

名前：レイ

二つ名：破壊神・魔帝・武神・反転王・吸魔王・神祖の吸血鬼
種族：半神半吸血鬼・不老不死・神祖の吸血鬼（満月の日のみ）
性別：男

普通の吸血鬼と違う点：1、日光に当たってもダメージを受ける事がない。2、銀系統でのダメージが増えるということはない：e t c.

レイ（神河 明人）

Lv. 49

力：490000

耐久：490000

速度：9800000

器用：490000

霊力：114837／114837

妖力：ERROR／ERROR

魔力：104394／104394

神力：108984／108984

スキル（能力）

《鑑定》《無効化》《反転》《召喚》《剣術》《体術》《魔法適正》《創造》《破壊》《血液操作》《血液創造》《蝙蝠化》《復讐者》《限界突破》《強制解放》

能力の説明？

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

説明：そのままの能力。様々な物の詳細を見ることが出来る。

《全てを無効化する程度の能力》（転生特典）

説明：全てを無効化出来る。例えば、攻撃を受けた事をなくすることもできる。

《森羅万象を反転する程度の能力》 (転生特典)

説明：概念をも反転できる。例えば、生を反転して死に出来る《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》 (転生特典)

説明：狙ったものは召喚できない。ガチャガチャ見たいなもの《剣術を扱う程度の能力》

説明：妖夢と同じ物

《体術を扱う程度の能力》

《魔法を使う程度の能力》

《森羅万象を創造する程度の能力》

・イメージしたものを創造できる

《森羅万象を破壊する程度の能力》

・指定した物を破壊する

使う魔法 (まだあるが)

魔弾【追跡セシ地獄の焰】

説明：人の頭一個分くらいのサイズの焰を自身の周りに生み出して、撃つ。追尾型

氷絶【エターナル】

説明：全てを凍らす吹雪を生み出す。広範囲殲滅魔法

霊帝【真実を貫く雷光 (ヴォーパル・ブラスト)】

説明：レーザー見たいな、雷を撃つ。直線にしか飛んでいかない。

光神【デイヴァイン】

説明：強化魔法。最大で光より速く移動することが可能。

死雷【死滅雷絶砲】

説明：黒雷を撃つ。レーザー……というよりか、ビームだ
：e t c.

満月時

レイ (神河 明人) 状態：神祖の吸血鬼化

L v . E R R O R

力：ERROR

耐久：ERROR

速度：ERROR

器用：ERROR

妖力：ERROR

魔力：ERROR

神力：∞

能力

《《血液を操る程度の能力》》

《《血液を創造する程度の能力》》

《《蝙蝠になる程度の能力》》

《《森羅万象を削除する程度の能力》》

《《限界値を操る程度の能力》》

《《ありとあらゆる物を停止させる程度の能力》》

《《程度の能力》》

《《血を吸った者を眷属にする程度の能力》》

《《能力を与える程度の能力》》

《《森羅万象を創造する程度の能力》》

《《ありとあらゆる物を複製する程度の能力》》

名前：紅槍 美夜

二つ名：

種族：天狗

性別：女

紅槍 美夜

性別：女

Lv. 86

力：860

耐久：860

速度：860

器用：860

妖力：2661

能力

【火を創造する程度の能力】

未開放

【成長速度を上昇させる程度の能力】

能力説明

【火を創造する程度の能力】

説明：火を創造することが可能。

転生

一話

(。・ω・)ん？

ここは……

……ああ

そうだ

俺は、

転生したんだ

一般人にね

十五歳で記憶を取り戻すように言ったのに……

何で25歳なのー!?

因みに、俺の容姿は今でも

高校生といわれてもおかしくない

見た目だ

まあ、なんせ

不老不死になる薬を飲んだからだ!!

何でそうなったのかというと、

………なんか運んでるな

と思いがラス瓶を盗み(もちろん中身はある)

変な液体を興味本位で飲んだらこうなっちゃった

そのせいで髪が白くなるわ、

目が赤くなるは……

………

まだあるがもういいか

街にはいれないから

今は森に住んでる

元々剣の才能が

あつたから

森でいきれたんだ
それに、

転生したおかげで、

能力がもらえたからこれからはハーレムを作るんだ!!

まあ、多分無理だと思うが……

あ、そうそう俺の能力は

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

《全てを無効化する程度の能力》

《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》

《森羅万象を反転する程度の能力》

《剣術を扱う程度の能力》

《体術を扱う程度の能力》

だよ!!

正直言ってチートだ

……………けど、記憶を取り戻す前は無効化と反転は
持つてなかったんだよな

でもいいや

考えるのがめんどくさい

そういや、

今何歳だろうな

少なくとも100年以上は過ぎてる

うくん、まあいいか

そうそう、

鑑定は自分の能力を調べたりもできる

そして……

自分のステータスも見れる

これにきずいたときは大興奮したね

因みに、自分のステータスはこれだ

「《鑑定》」

レイ（神河 明人）

Lv. 132
力：1320
耐久：1320
速度：2640
器用：1320

霊力：809
妖力：4892
魔力：999
神力：120
能力

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

《全てを無効化する程度の能力》 (転生特典)

《森羅万象を反転する程度の能力》 (転生特典)

《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》 (転生特典)

《剣術を扱う程度の能力》

《体術を扱う程度の能力》

ステータスはそこまで強くない

せいぜい大妖怪10体相手できるくらいだ (能力なし)

(。・。ω・) ん？

普通に強い？

まあね

これくらい強くないと、生きていけないしね

東方Projectの世界のみんなは強すぎるんだよ
ほんとに

妖怪の気配がする
（。・ω・）ん？

大妖怪くらいかな
この妖力の量

森での戦闘かあ
久しぶりだな

最近はみんな逃げてくのに

楽しみだな

「やあ」

「ああ、こんにちは」

そんなに強くなさそうだな
金髪美少女か……

まあ、見た目で決めるとダメなんだよね

この世界は特に

「何をしに来たんだい？」

「お前を喰いに来たんだよ!!」

そして、焔の剣を出した

「馬鹿にしてんのか？」

その程度で倒せるとでも？

なめられたもんだねく

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!! (相手の少女が地面を思いつ切り

蹴った音)

うおっ

速いな

もう目の前にいる

敢えて斬られてみるか

「せいやあ!!」

横に真っ直ぐ斬るのかな

でもまあ

ザシユツ……

【ダメージを無効化】

「え!?!」

「だから効かないんだって。前に言っただろ」

残念でした

俺には勝てないぞ☆

「グッ……」

「はあ……さあさあ帰りましょうね」

「……………グッ……………」

「帰れ帰れ」

「う……………くそお!!」

案外あつけないな

二話

おーっすおらの名前はレイだ
よろしくーなあ

俺は今素振りをしているんだ
ただ、まいかいじゃましてくるやつがいんだよ……
多分そろそろ……

「魔弾【追跡セシ地獄の焰】」

「またかよ!!……チツ【無効化（キャンセル）】!!」

それを言い終わった直後、炎の玉が俺に激突した

……森で炎を使うなよ

けど、俺の身には一つも傷なんて付いてない

「……相変わらずのとんでもない能力じゃな」

「ふん、まあな……それと、森で炎系統の術を使うな!!」

「うぐっ……し、しようがないじやろう? 我の能力は……」

「【火を創造する程度の能力】……だろう?」

「そうじゃ、だから……」

「しようがないと?」

「……あ、ああそうじゃ」

「ふーん……ちよつとお話ししましょうか……」

「ひえっ……いいいやじゃ~!!」

○☆H☆A☆N☆A☆S☆I中々

そういえば、こいつの名前を覚えてなかったな……

こいつの名前は、紅槍 美夜

職業は天魔……だったか? 覚えてない

それでステータスは、こんなもん

~~~~~

紅槍 美夜

性別：女

L v. 86

力：860

耐久：860

速度：860

器用：860

妖力：2661

能力

【火を創造する程度の能力】

未開放

【成長速度を上昇させる程度の能力】

これだ

正直言つて低く見えるだろ？

でもな？

これでも強い方らしいんだよ？

信じられないよな……

この未開放の方の能力は、経験値の獲得速度が上がる

……と書いてあった

鑑定で調べたらね!!

そうそう!!

本当にこいつが強いのか疑問があるだろう？

てことでそこらの妖怪を調べてみたんだよ……

そしたら、

下級妖怪A

L v. 5

力：50

耐久：50

速度：50 (+10)

器用：50

妖力：97

能力

【移動速度が上昇する程度の能力】

こんなに低かったんだよ……

あいつも一応「一応は余計じゃ!!」……強いみたい

「で?今日はどうしたんだい?」

「特に何も無いぞ?」

「……ん?何も無いのか」

「ああ、そうじゃ」

「何するかの?」

「うくん、どうしよう……ん?」

何だこの嫌な感じ……

「急にどうしたんじや?」

「……何者だ!!いるのは知っている!!」

何なんだ……

人間か?

いや、違う……

見た目とかは人間と同じだが……

「お前を退治しに来た!!」

「ほおつ……やる気か?この俺と……!!」

髪の色は白……かな?

目の色は赤い……

……まさか!!

【鑑定】

藤原妹紅

Lv. 101

力:1010

耐久:1010

速度:1010

器用:1010

妖力：3272

能力

【老いる事も死ぬ事も無い程度の能力】

「!!」

ほんとに原作キャラかよ!!

ははは……

「どうしたんだ？急に驚いて？」

「いや？なんでもねえよ……」

原作キャラはほとんどが強いらな!!

なので、

「先手必勝!! 【混沌世界（カオス・ワールド）!!」

【混沌世界（カオス・ワールド）】は、

広範囲の状態異常の魔法だ

混沌と言ってるが、

ステータスがダウンするだけだ

どれくらい低下するかという……

全能力ー50%だ

能力は弱体化はしない

「!!何をした!?急に力が……」

「むっ……なぜ我にもかけた？」

「ん？特に理由はないぞ？」ニッコリ

「ひえっ」

「グッ……身体能力が低下してもお前には負けない!!」

「……俺お前に何かしたっけ？」

「……」

「おいこら」

「だ、だっってお前、あの薬飲んだんだろ？」

「(。・ω・) ん？ああ、飲んだが……だからどうしたんだ？」

「……(相手も不老不死だからって負けたくないわけじゃないぞ!!ほ、

ほんとだからな!?)」

「……（急にどうしたんだ？黙って……）」

「そーいや、何で俺があーの薬を飲んだと思っただ？」

「お前、あの場所に私がいたのを覚えてないのか？」

「いや、覚えてるぞ？」

当然だろう、原作キャラなんだし……

それに、原作キャラだって知らなくても覚えてるだろ、

あのレベルの美少女だしね」

「!?ななな、何を言っ……!!」

「やべーまた言ってしまった……」

俺の悪い癖だ……

思っただことを口にしてしまう

「……ッ!!わ、私は帰る!!」

「あれ？そーいえばあいつ何しに来たんだ？」

「やあっ…」

### 三話

暇だ〜!!

なにかおきな……

たったった……

(。・ω・) ん?

走ってる音……

この感じ……

はあ……

助けに行こうかね

??? side

「グツ……」

クツ糞!!

こんなことになるなら家からでなければ……

ていうか、なんでこんなところに狼の妖怪が……

「ぐへへへへ……」

「うううう……吹き飛ば!!」

「があっ!!」

「よし」

今何をしたかって?

私の能力ですよ

能力名は、【触れた対象を吹き飛ばす程度の能力】

種族は人間です

でもこの能力では……

「ぐう……やりやがったな!!」

「!!やっぱり」

妖怪は倒せないんです!!

ふう……

取り敢えず……

石に触れて……

飛ばす!!

「ふん」

バンツ!!

妖怪は尻尾で石を破壊した

「どうしよう……」

街からは距離があるし……

しょうがない!!

石でも飛ばしまくる!!

「いい加減に……して!!」

バババババツ!!

え……

全部壊された……

「ふん、甘いんだよ!!」

「ガハッ」

一瞬で接近されて尻尾でぶん殴られた

その一撃で、

80メートルも飛ばされた

そして、

「うぐっ」

木に激突し、

止まった

「(この……ままじゃ……私……)」

だが……

気づいたときには

あの妖怪がすでに目の前にいた

「え？」

今度は腕を噛まれそうになった……が、

「おいおい、何をしているんだい？ 狼君？」

「ヒッ」

その時、突然物凄い力を持った人間？ が現れた

そして、威圧感だけで、





彼は、いくらとつきに張ったからと言って

大妖怪一体位の攻撃は防ぐのである

なのに、あの狼の妖怪は体当たりだけで壊したのだ  
「チッ【この手に剣がないと言う事実を反転する】!!」

そして、彼は、手に剣を具現化させた

「さすがに本気で行かせてもらおうぞ!!」

「a a a a a a s d w e x q d e ; , d e w m f i 3 o f m o e ; m k  
m 3 2 o f m !!」

「ハアツ!!」

ひっかかり攻撃をしてきたので、

その攻撃を剣で受け流し、

殴って吹っ飛ばした

「思ったよりも一撃が重い……」

今のうちに鑑定しとくか？

能力を知つといた方がいいしな

【鑑定】

名無し

L v . 1 4 3

力 : 3 0 0 0

耐久 : 1 4 3 0

速度 : 1 4 3 0

器用 : 2 0 1 1

妖力 : 5 1 0 2

能力

【一時的に身体能力を強化する程度の能力】

な!?

……ツ!!

はあ……

能力とステータスの相性がいいな

面倒な相手だ……

「チツ来るか……!!」

「g a a g a g a g g a g a g g a g a a g a g a g a g g g a a g a g

a!!」

今度は、引つ掻き攻撃と尻尾での攻撃だ

「うぐっ」

彼は、何とか攻撃をしのいでいたが、  
とうとう、

ひっかかり攻撃を一撃受けてしまった

「くそが!!」

一回避難しようか……

「俺が空を飛べないという事実を反転する!!」

そうして、空を飛べるようにして、

空中に避難した

「雷光【電光石火】!!」

電光石火という魔法は、

ステータスの速度を大幅に強化する

「今度こそは……!!」

## 四話

尻尾での攻撃を、  
避けて引つ掻き攻撃を、  
剣で逸らす

その繰り返しだ

「がああ!!」

「a a a a a s d w e!!」

傷は彼の方が多い

なんせ、

狼妖怪は一回も攻撃を受けていない（足は既に治ってる）

「ぐうっ」

今度は、腕に攻撃を受けてしまった

「魔力がもつたないがしょうがねえ!! 光神【ダイヴァイン】」

「ぎゃうん!!」

狼の認識できない速度で走って、

すれ違いざまに、

腹に一撃決めた

「uuuuuuuuuuuuuuuuuuuu!!」

「ッ……うるせえ!」

彼の嵐のような連撃を、

妖怪は爪と尻尾で打ち返す

「失墜【ダウンバースト】!!」

「ギギギギギ!!」

……この魔法は風の塊を作り出すだけである、多少操れるが、風の塊の動きがそんなに速くないのであまり使い勝手がよくない

だが……

「上から押しつぶすように放てば……」

「?!?!?!」

「?!?!?!大きく吹っ飛ぶ!!」

「?!?!?!ちか……」

こつちに吹っ飛んできたので

彼は、咄嗟に【吹っ飛ぶ向きを反転する】

「g a u u !!」

逆の方向に吹っ飛び、

大木に激突して、

停止した

「はあ……はあ……」

疲れた……

でも、

どうせ生きてるんだろう？

「早く来いよ、いぬっころ」

「!!なめやがって!!」

理性を取り戻したのか？

いや、

もともからあったのかな？

……まあ、いいや

「犬っころ、お前はもうお終いだ」

「な?!?!……馬鹿にするな!!」

馬鹿にしたわけではなく、

ほんとに終わりにするだけだが……

【生きているという事実を反転する】

これで、ENDだ

「見ていたが、おぬしの身体能力では勝てないほどの強者だったのか？」

「ああ、あいつは強かったよ」

「最後は、能力で殺したんじゃない？」

「ああ、生きている事実を反転したんだ」

「……相変わらず……その能力強すぎじゃろ」

「それは、お前が言えたことじゃないだろ？」

「ははは!!確かに私の能力も強いが、お前の能力の前ではどんな能力も無意味じゃろ?」

「まあね」

「……どうしたらそんなに強くなれるんじゃない？」

「戦闘技術は才能に恵まれたからこれくらい強くなれた、だが、能力の方は知らん」

「ふむ」

「100年間才能がないのに鍛え続けて強くなっても、結局は天才に直ぐに抜かされる……」

「……まあ、そうじゃな」

「お前の場合は術の方が才能があるんだから頑張れ……」

「やっぱり私は近接戦闘の方は才能がなかったのか……」

「そういや、レベルは上がったかな？」

「鑑定」

レイ（神河 明人）

Lv. 200

力：2000

耐久：2000

速度：4000

器用：2000

霊力：912

妖力：5523

魔力：1208

神力：209

能力

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

《全てを無効化する程度の能力》

（転生特典）

《森羅万象を反転する程度の能力》 (転生特典)

《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》 (転生特典)

《剣術を扱う程度の能力》

《体術を扱う程度の能力》

《魔法を使う程度の能力》





## 五話

あの戦いの時、能力がないと格上に勝てないんだな……と、絶望した

なので、修行だ修行!!

その為に、

能力で時間の流れを弄った

お陰で全てが止まっている

チートだわ【反転】マジで有能  
さしてやるか

ふう……

疲れた……

今日も終わりでいいか

(。・ω・)ん?

修行の様子?

ゼンカット☆

マジで疲れた

ステータス見てみ?

――――  
レイ(神河 明人)

L v. 2000

力：10000

耐久：10000

速度：20000

器用：10000

霊力：48204

妖力：ERROR

魔力：10292

神力：8209

能力

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

《全てを無効化する程度の能力》 (転生特典)

《森羅万象を反転する程度の能力》 (転生特典)

《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》 (転生特典)

《剣術を扱う程度の能力》

《体術を扱う程度の能力》

《魔法を使う程度の能力》

-----

いやっほーい!!

っおい!!

っおくなつたよ!!

「獄炎【地獄の焰（インフェルノ）】」

「久しぶりだな……その攻撃 強化【プロテクション】」

この魔法は、

少しだけ防御力を引き上げるだけである

「ぬう……今回も無効化……!?!」

「どうした?」

「どこでそれほどの力を……」

「(。・ω・) ん?……ああ、そう言う事」

「それで、どこで?」

「止まった空間で鍛えた」

「え?」

「だから、止まった空間で鍛えた」

「……因みに、どれくらいじゃ?」

「10年は超えたはず」

「……」

「(。・ω・) ん?これくらい誰でも出来んだろう?」

「おぬしの……いや、なんでもない」

「暇だから付き合え!! 魂喰【ソウルイーター】!!」

「いいぞ!!だが、今回は勝たせてもらう!! 獄炎【灼熱地獄】!!」

お互い、術で相殺した

「ちよつと借りさせてもらうぜ!! 魔弾【追跡セシ地獄の焰】」

「なら、我も 魔弾【追跡セシ地獄の焰】」

「これもお互い、相殺した

「潰れろ 常闇【ノワール】」

「ぬううう…… 爆発【バースト】」

爆発の光で、闇が消えた

「お先じゃ!! 太陽【アストラル・サン】」

「無駄だ 無効【マジックキャンセル】」

小さい太陽みたいな炎を、能力で無効化した

「ズルい!」

「ヤハハハハ!!すまん!!」

「ぐう…… 悪火【デーモン・フレア】」

「効きませーん 風術【霸王風神刃】」

お互いの術がぶつかり合い、大爆発を起こした

「まだまだ!! 模範【現世斬】」

「!!グツ…… 火盾【ファイアーシールド】」

半人半霊剣士の技を放ったが、火の盾によって防がれた

「ふむ 模範【マスタースパーク】」

「ぬううう…… 炎弾【バーニング・フレア】」

光と光がぶつかり合った、

だが、

熱光線が押し負けている

「やるね〜!! 異常【カオス】」

「!!力が……ううう……」

混沌世界の単体用魔法

効果はこっちの方が上だ

「終わりだ!! 終焉【―――――】」

「ぎゃあああああ!!」

きづいたら、吹っ飛んでいた

「気絶しちゃったか……」

## 六話

俺は今、冥界に来た  
ん？

突然何を言ってるんだって？

いや、俺にも分からん

昨日までは山にいたんだよ

それでいつも道理、寝たんだ

けど、起きたら、

何故か冥界にいたんだ

ほんとにびっくりしたよ……

でね？

只今、半霊の剣士に斬りかかれてるんだよね……

「せいっ」

「せやあ!!」

相手、滅茶苦茶強いんだよね

何回も斬りあってるのに、

こつちばかり傷を負うんだから……

「ガッ……!!」

「ハアツ!!」

こんな長時間斬りあった事ないわ

だって、

五時間だぜ？

いい加減疲れました〜!!

あえて、今まで能力を使ってなかったけど、

そろそろ使っていいかな？

「疲れたしそろそろ終わりにするか？」【再生速度が遅いという事実を

反転】

「ぬうう……」

それから、一分で全回復  
飽きてきたし、

剣技と拳技を使おうかな

「めんどいわ!! 拳技【破拳】」

「!!ガッ……」

刀を回避して、懐に潜り込み拳技を放った

直撃して、半霊剣士は吹っ飛んだ

「いい加減休ませてくれ……」

今のを喰らっても、

普通に動いていた

「すげえなおい。あれは内部から破壊する特殊な拳技だったのに。それを耐えると……」

「うぐっ……」

「面白い……氷武【ラグナロク・アイズ】それから、魔炎【神々を追放せし魔の焰】」

「ッ……!!」

彼は、咄嗟にその場から飛びのいた

「む……避けたか」

彼はさっきまでいたところを見てみると、

焼けてなくなっていた

そう、本当に焼けて消えていたのだ

「貴様!!」

「流石に無理かな?てことで 剣技【隴飛燕】」

「なっ!?!」

この、隴飛燕という剣技は、

偽物を見せる……それだけだ

「ぬううう……【未来永劫斬】」

「グあっ!?!」

彼は、姿を少しも捉えられなかったのだ

気付いたときには、腹を斬られていた

「があっ……クッ【傷を負っている事実を反転】!!」

「ハアッ!!」

何回も何回も斬りあつてると……

突然、お互いとも動けなくなった

「はいお終い〜」

「!!」

レイの後ろから声がしたのだ

「ゆ、紫様!?!こ奴は侵入……」

「私が連れてきたの。いつ終わるかな?と思つてたらまさか五時間以上かかると思つてなかつたわ……」

「お前は誰だ?それに、俺を連れて来たつて……」

「私の名前は八雲 紫。妖怪の賢者とも呼ばれてますわ」

「ふむ、じゃあなんで俺をここに?」

「それは……」

「どうせ、あの桜をどうにかしろつてことだろう?」

「!!なんで?」

「だつて滅茶苦茶妖力持つてるじゃん。明らかにあれしかないだろ俺が呼ばれた理由なんて」

「そ、そう。因みに、あなたなら止められる?」

「ああ。いけるが……」

「本当!?!」

「ほんとだつて……」

能力を使えばちよちよいのチヨイだ

「なら!!」

「うーん……まあ、いいか。やるよ」

さてと、沈めるか

「まずは【妖力を持つているという事実を反転】」

そういうだけであら不思議、

妖力があの桜から消えちやつた!!

「!!何をしたの!?!」

「(。・ω・)ん?きずいたのかお前は……」

「そりゃあわかりますよ」

「まあ、どうでもいいが……【生きている事実を反転】」

桜が一瞬で枯れてしまった

「これでお終い!! 帰らせてもらう!! 移動【テレポーテーション】」

「ちよっと、まっ……」



## 七話

冥界に行ってから10年後

ああ、暇だ……

詰まんない

何か面白い事……

あ、そういえば新しく作った魔法を試してみるか  
えーつと……ここをこうして……

よし、発動するぞ

雷絶【フォース】

おお!?

すげえ……

身体から雷が出てる……

この魔法は、身体能力を強化する物だ

「(。・。ω・)ん?……ツ!!」

「お邪魔するぞく、てことで 龍符【炎龍之息吹】」

「おい!? 凍結【絶対零度】!!」

ギリギリで相殺に成功した

「不意打ちでもダメなのか……」

「ハハハハハ!!そう簡単には負けないよ!!」

「ううううう……」

「はは……ん?」

「どうしたんじゃ?」

「遠くに気配を感じた」

「一般人じゃないのか?」

「違うぞ……滅茶苦茶遠いのに、こつちを見てるし」

「見つけたからってどうにかできるものでもなかろう?」

「いや、そんなこともないぞ?」

術を構築して……完了

「今から撃つわ……」

「む……まあいいじやろ」

「行くぜ!!新魔法 雷弾【ライトニングスナイプストーン】」

この魔法は、遠距離の敵を倒すための魔法だ

最大距離は、500kmだ

まあ、ライフルの魔法版と思ってくれればいいさ

「……………おお、防いだみたいだぞ!」

「ほお……………おぬしの全力を防げる奴がおるとはの〜」

「今の……………火属性?しかもこの炎……………絶対あいつじゃん」

めんどくさいことになりそう……

「やあ」

「……………ああ。こんにちは」

「……………」

予想通り、もこた「誰がもこたんだ!!私の名前は妹紅だ!!」…………妹紅だ

「急に叫んでどうしたんじや?」

「いま、こいつが変なことを考えたからだ」

「すまんすまん……………」

「それで?今日も戦ってほしいのか?」

「いや、今日は違う」

「?」

「暇だから来た」

「生憎、面白いものはないぞ?」

「そうか……………」

「あ、そういうえば、もこた「妹紅だ!!」…………失礼、妹紅って今なにしているんだ?（仕事をしているのか?）」

「今は特に何もしてないぞ?」

「そうか」

面白いことは……あ

「勝負しようぜ」

「ん？別にいいけど……何をするんだ？」

「あいつを撃ち落とした方が勝ちだ」

「いいぞ」

あいつ………美夜のことだ

「じゃあ、お先失礼 冷光【フロストビーム】」

この魔法は、光線で、対象に当てると移動速度が落ちる

「うぎやあ!」

「当たったけど落ちなかったか……」

「私の扱いがひどすぎるじやろう!!毎回!!」

「まあまあ」

「うおっ……妹紅も妹紅だ!!火撃ってくるのやめろー!!」

「……当たらない」

「無駄にすばしっこいもんな」

「無駄にとはなんじや無駄にとは!!」

「落ちろ 失墜【ダウンバースト】」

「うぎやあああああ!!」

風の塊を上からぶつけて落した

「ぐううう…… 火盾【ファイアシールド】」

「もこたん!!いけ!!」

「もこたんいうな!! 火龍【炎龍之息吹】!!」

ドラゴンのブレスをただの火盾で防げるはずもなく……

火盾を破壊して、

美夜を撃ち落とした

「今回は私の勝ちだな」

「マジかよ……」

術式を組み込むの速すぎだろ……

それにあの魔法……

教えてないぞ？

妹紅に……

「いててて……」

「大丈夫か？美夜」

「大丈夫なわけがなからう!？」

「流石に妹紅があれを使えるようになってたとは……」

「びつくりじゃ」

「……あ、傷を今すぐ治しとく」

「ああ、よろしく」

——治療【パーフェクト・ヒール】

「……おお、すごいのか」

「だろ？まあ、あまり使わないんだがな……」

「おぬしは不老不死だしな」

「そうだ」

## 八話

「ハアッ!!」

「セイツ!!」

金属音が鳴ってる

「クツ…… 神術【神力障壁】」

「!!ハアッ!! 強化【エンハンス】」

神力で創った壁を切り裂いた

「!? 魔力【魔力障壁】×10」

「!!」

今度は、切り裂かれないで済んだ

何で斬りあってるのかというと……

あいつに言われたんだ

『なあ？彼女に剣を教えたくないか？』

『彼女？ふくん別にいいが……彼女の名前は？』

『彼女の名前は……』

彼は言った

”だと

”  
魂魄妖夢

マジかよ!?

原作キャラじゃん!!

その中でも、好きなキャラの一人!!

いやっほおおおおお!!!

マジで最高!!

てことで、今冥界にいるんだよね  
まじで、

剣を極めていてよかったかも……

「今日はこれくらいで終わりにしようか、妖夢」

「は、はい!! 師匠」

今は妖夢、というよりは幼夢……という感じだ

可愛い……

「あ、もうこんな時間じゃん。料理手伝おうか？」

「い、いいんですか!？」

「ああ、幽々子さんめっちゃ食べるもんな……」

「いつもあんなに食べて、どこに吸収されてるのか気になります」

「今日は何を作るんだ？」

「今日はですね……」

「「「ちそうはまびだした」」」

「じゃあ、片づけますね？」  
「うん」

「手伝おうか？」

「いえ、大丈夫です!!」

「そうか」

『レベルが上がりました』  
ん？

「【鑑定】」

レイ（神河 明人）

Lv. 201

力：11000

耐久：11000

速度：22000

器用：11000

霊力：912

妖力：5523

魔力：1208

神力：209

能力

《ありとあらゆる物を鑑定する程度 of 能力》

《全てを無効化する程度 of 能力》 (転生特典)

《森羅万象を反転する程度 of 能力》 (転生特典)

《ありとあらゆる物を召喚する程度 of 能力》 (転生特典)

《剣術を扱う程度 of 能力》

《体術を扱う程度 of 能力》

《魔法を使う程度 of 能力》

《森羅万象を創造する程度の能力》

(NEW!!)

ん？

新しい能力じゃん

創造か……

まあまあだな

正直言って

反転で創造できるし……

まあ、いいか



「よーむ」

「ど、どうしました？師匠」

「よーむ可愛い……」

「!!なななななな、何を言つて!？」

「だーかーらー……よう……む……すびー  
すびー」

「……あれ？寝ちやった？」



「魔法を作るぞ!!」

「いえーい!」パチパチ

「まあ、一つは作ってあるんだけどね」

「見てくださいい!!」

「おけ……」

「ごくっ」

---

---

魔装【バハムート】

詠唱長すぎる……

「!？」

「おお、すげえ」

身体が魔力に包まれた

そういえばこれ身体能力を強化する魔法だったな

「し、師匠私にも!!」

「ああ、いいぞ?」

「やった」

---

魔装【バハ

ムート】

「おおお!?すごいです師匠!!」

「そうか?」

「これ結構魔力を喰うな……」

「無効【マジック・キャンセル】」

「!!いきなり魔法を消すのはやめてくださいよ!!師匠!!」

「ハハハハ!!すまん」

「次の魔法は何ですか?」

「……行くぞ」

「ドキドキ……!!」

——黒魂【ダークソウル】

この魔法は、即死魔法。あ、妖怪専用です。

「なんも出てないよ?」

「まあ、ね。途中でキャンセルさせてもらったよ」

「えーっと…… 魔導砲【マスターブラスト】」

これは、ビームだと思ってくれれば構わない

「!!キヤツ!!」

不味い!!制御をミスって妖夢の方に!!

「詠唱破棄 魔装【バハムート】&雷絶【フォース】更に雷光【電光石火】」

詠唱破棄とは……

詠唱なしで魔法を発動できる

だが、魔法の効果が下がってしまうのであまり使わない

「妖夢!!……チツ 詠唱破棄 神術【神力障壁】」

ギリギリ間に合わないと思った彼は妖夢の前に白銀色の壁を創造した

……多少、防いでくれたが、壊れてしまった

だが、それで十分だった

「剣技・霊剣術・【霊空斬】!!」

空間をも切り裂くともいわれる一撃を放った

「すまないね、妖夢」

「もう、分かりましたから!!謝らないでくださいよ!!」

## 九話

「刀術・靈劍術・【靈空斬】」

「空斬【テイメンシヨン・スラスト】」

物凄い音が鳴り響く

「ハアツ!!【現世斬】!!」

「ふむ。模範【現世斬】」

お互いに相殺した

「ツ……せいや!!【靈空斬】」

「またか!! 劍術・応用・【縮地】!!」

妖夢の技が来る前に懐に潜り込み振り抜いた

「!?うそ!? 靈術【靈壁】!!」

「クツ……手首いった!!」

刃が当たる前に靈術で防がれた

「師匠!!勝たせてもらいます!! 靈術【靈力解放】&衝撃【シヨック・ウエーブ】」

「グツ……ガツ……」

靈力解放は一気に靈力を解放して、

力の波で吹き飛ばす技。

要は吹き飛ばすだけの技。

衝撃【シヨック・ウエーブ】は、

衝撃波で対象を吹き飛ばすだけの術である

両方同時に来たためいくら彼とはいえ、吹き飛ばされてしまった  
「行きますよ!!【未来永劫斬】!!」

「クツ……（不味い!!） 魔術【魔力障壁・改】!!」

彼は咄嗟に魔力障壁の上位版を張った

けれど、妖夢によって切り裂かれた

「はあああああああああ!!」

「はあ……負けたか……」

彼は妖夢に負けた（ハンデ付き）

「お前強くなりすぎだろう……」  
「フフフ……今度は、全力時の師匠に勝たせてもらいますよ!!」  
「ハハハハハ!!調子乗んなやボケ」ボスツ  
「あいたつ……えへへへへへ……」  
「妖夢? (この時くらいはいいか)」ナデナデ

「妖夢く強くなつたわね〜」  
「い、いえ私なんてまだまだ未熟ですよ!!」  
「頑張ったし、怖い話をしてあげましょうか?」  
「だ、大丈夫です。幽々子様!!からかわないでくださいよ!!」  
「あらそう……」  
「そ、そんなにあからさまに落ち込まなくてもいいじゃないですか!!」  
「……妖夢くお腹すいた〜」  
「分かりましたよ!買い物行ってきますね」  
「行ってらっしゃい〜」

「妖夢に負けるとは……鍛えないと……」  
「剣術を増やすか……?」  
「やりに行くか……」

「うくん、空中でもすぐ対処出来る技……」

「回転切りとかかな？」

「まあ、回転切りでいいか」

一時間後

「靈術【靈力解放】」

靈力解放は吹き飛ばすだけでなく、  
靈力関係の技なども強化できます

それと、身体能力も若干強化される

「ふう……行くぞ!!」

「劍術・靈劍術・【回転斬り】」

ぶおおおん!!、と風を切る音がする

「あややややつ流石ですね、レイさん」

「(。・ω・)ん?……ああ、文か」

こいつの名前は射命丸 文。

原作キャラだ。

であったのは、9年前だ

「どうしたんだ? 文。」

「いえ、特に何もありません。ここ通った時に偶々レイさんがいたのが  
見えて」

「そういうことか」

その後、少し雑談した後、帰った



## 十話

「ふわ〜ああ……」

「ふう……」

（。・。・。ん？）

ここは……

どこだ？

昨日は家で寝たはずなのだが……

また無意識に能力を使ってたか……

前の時は、

過去に戻っていた

そこで、永琳という女の人と出会った

そして、色々あつて友達になった

今回はなんだろうな……

「ん？妙に明るいな？それと、悲鳴が聞こえる？方角は……あつちか」  
軽く地面を蹴り屋根の上に乗って走った

「何でこういう事件ばかり起きるんだ……転移した時ばかり……」

「あそこか……まさか、月のやつらか？この感じ……」  
「さて……あぶな!？」

嫌な予感がしたので咄嗟に左にステップを踏んで避けた  
自分がいたところを見るとレーザー……いや、ビームか？が通った

「チツ……また来るか 火盾【ファイアーシールド】×8」

ビーム？がまた来たが火の盾が多少削れただけでとまった

「ここは家の上だぞ。壊す気かよ……」

ここにいると家が壊れると思った彼は、

軽くジャンプして、

戦場に降り立った

「!?何者だ……?」

「俺か？レイだ。種族は不老不死」

「な!?何故……いやいい、みんな撃て!!」

チツ……

この量は流石に受け止めるのはめんどくさいぞ……

「ふう…… 神術【神力障壁】」

「……な!?なぜおまえが神の力を持っている!？」

「そんなのどうだっていいだ……ろうが!!」

一瞬で懐に潜り込み腹部を切り裂いた

「ガッ……」

「雑魚い……な!!」

「貴様!!」

右から斬りかかってきた兵士？の剣を、

回避して首を切り裂いた

「弱い…… 霊術【霊力解放】 & 霊術【霊力追尾弾】」

「ガッ……」

「ウ……」

「グフツ……」

霊力を解放して、近くにいた敵を吹き飛ばして、

体制が崩れてる間に、霊力の弾丸を撃ち込んだ

ヒットした数は八人だけだ

ほかのやつらは全員避けるか、或いは弾がそっちに向かってなかったやつだ

「貴様!!月に……」

「月のことなんざどうでもいい……失せろ!!」ごわっ!!

霊力・魔力・妖力・神力を同時に開放した

「ひ!?グ……こっちは姫様を月に帰すために……」

「……と言ってるが?どうなんだ?」

「どうせ帰っても、拷問でもなんでもする気だろうし帰りたくない!!」

「そうか……」

「!!そうか……」

ん?何だ?滅茶苦茶嫌な予感がするんだが……

「いまだ!!撃て——ガ……」

そう叫んだ瞬間、腹に矢が貫通していた

「あれ?永琳?」

「はあ……はあ……姫様……からすぐに……」

「……つと移動させてやる 移動【テレポーション】」

「え!」

「これでいい……さて……」

「ヒッ!!」

「お前らには死んでもらおうか」

「う、うてー……!!」

ビームなど色々飛んでくるが……

「それらは効かねえよ 霊術【霊力完全解放】& 霊剣術【靈空斬】三十  
二連!!」

「はあ……はあ……全部斬ったぞ……」

「!! 化け物か!?! ……だが、もう体力は残っておるまいな?」

「ふん、だから?」

「全員奴を殺せ——!!」

「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」

「めんどくさい……」「ボンッ」

「せいや!! 模範【現世斬】」

一人を妖夢の技で斬り殺した

「次つぎいいいい!!」

「ぐううううう……何だこの馬鹿力は!？」

そりゃあ、鍛えてるし……

「じゃあな!! 黒魂【ダークソウル】」

即死魔法を当て、殺した

「はあ!! 霊術【落雷】!!」

「!! 霊剣術【霊空斬】!!」

雷を剣で切り裂き、

即座に加速して、

敵対者の懐に潜り込み、

両腕を高速で斬った

「ガッアアアアア!!」

「ふん、じゃあな」

首に一閃

「後は、リーダーさん。もう一人しかいないぜ？」

「な!?!……くそが!! 加速【アクセルブースト】オオオオオオ!!」

「その程度の加速レベルじゃ……勝てないよ」 魔炎【神々を追放せ

し魔の焰】!!」

黒い炎を生み出して、首を焼いた

「アアアアア!!」

「ん? おかしい……何故……」

「首が焼き切れてない!？」

「フフフフ……ハハハハハハ!! 残念だったな!! その程度では死なねーんだよ!!」

「めんどいわ!! とつとと死にやがれ!!」

「ふん、お前が死ね」

そういつた瞬間、不老不死の彼でも認識できない速度で迫ってきて、腹を斬られた

「があっ……」

「オラオラ!!」

嵐のような乱撃を何とか防ぎつつ、術を組み上げていた

「ツ!!……お返しだ!! 空斬【ディメンション・スラスト】!!」

「!!ぎっ……」

彼は、敵対者の腕を切り裂いた

「ガッ………あめーんだよ!! 黒雷【ダーク・ブラスト】!!」

「チッ…… 短距離移動【テレポート】!!」

即死魔法と思われる魔法を放ってきたので、

高速で術式を組み上げ転移した

左側に……

「!!空間魔法をそんな速く……は!? 流星【メテオ】!!」

「そろそろ疲れてきたな…… 魔法支配【マジック・ジャック】」

星を降らせる魔法を、彼が支配して、敵対者を星を落とす目標地点として捉えるようにした

「ハアッ!! 拘束【バインド】!!」

「はっ……甘い!! 無効【マジック・キャンセル】」

拘束魔法を無効化しつつ、

とある術式を組み上げていた

「チッ……めんどくさい!!とつとと死にやがれ!!クソガキイイ!!」

「そう簡単に死んでたまるか……」

その時、星が落ちた（敵対者に）

「ガああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「オイオイマジかよ」

「……ぐううううう……いてえなあ……」

「俺より化け物だなっ……」

いきなり、突っ込んできたので、

剣で受け流し、

腹を蹴っ飛ばして体制を整える

「そろそろか……」

「a a a s s l w, w m e f i r j f r u n r x e r g y r n j t  
n t」

「終わりだ…… 終焉」

## 十一話

「疲れ……た……なあ……」スヤスヤ……

彼は、地面に寝っ転がりそのまま、意識を落した

『能力自動発動……』

「すう……すう……すう……すう……んにや？」

「ここは……？」

彼が転移した場所は、自分の部屋………で  
はない。

じゃあどこに転移したのか？

それは……



魔界です♥

「最悪だ……今お腹痛いの……」

「(。・ω・) ん？なんだありやあ？」

そこには、真つ赤な液体が入った瓶があった

「これを飲めと？そう言う事なのか？」

「いかにもまずそうなんだが……」

「頂きます………うえつ………不味!! 不味  
すぎる!!」

なんだこれは!?

なんか急に身体が熱く……

「ぎああああああああああああああああああ a a m k l z s m x  
e l k c e c j e r k l v c」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ  
イタイイタイイタイ!!

身体が焼けるような暑さと、

身体がぐちやぐちやになるかのような痛みが走った

「……は!?!……ん?きつきの痛みが消えてる……」

「はあ……あれ飲んでなんか変わってないよな……」《鑑定》

レイ (神河 明人)

L v. 1

力 : 1000000

耐久 : 1000000

速度 : 2000000

器用 : 1000000

霊力 : 1000000

妖力 : ERROR

魔力 : 1000000

神力 : 1000000

能力

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

《全てを無効化する程度の能力》 (転生特典)

《森羅万象を反転する程度の能力》 (転生特典)

《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》 (転生特典)

《剣術を扱う程度の能力》

《体術を扱う程度の能力》

《魔法を使う程度の能力》

《森羅万象を破壊する程度の能力》 (能力反転)

《血液を操る程度の能力》

《血液を創造する程度の能力》

《蝙蝠になる程度の能力》

「(。・ω・) ん?……バグかな?」

おかしい……いくら何でもステータス変わりすぎ……

『種族変化：人間（不老不死）↓半吸血鬼（不老不死）に変化しました』

「ハア!?!何を言って……」

ズドオオオオオオオン!!

「い、いやな予感しかしないぞ……」

後ろからおぞましい気配を持った妖怪?が来てる

「、、?」

「ガッ……」

変な声?みたいなのが後ろからすると思った瞬間、

物凄い衝撃が背中に来た

そしてきずいたら……

「ん?……ハア!?どんだけ飛ばされてんだよ!?!」

吹っ飛ばされてい。取り敢えず下を見てみると自分のさつきいた場所が見えなくなるレベルまで飛ばされた

「移動【テレポーターション】」

いくら何でもここから落ちるのはまずいのでてれテレポーターションで戻った

「いきなり何なんだ」

さつきいたところに戻ると、一人の少年?いや、青年か?がいた

「ん?いやあすまないね。間違って吹っ飛ばしちゃった」ハハハ!!

「(こいつ……)あまり人を馬鹿にするなよ?雑魚風情が……」

「ん?僕が君より劣ってるって?……そんなの僕の方が上に決まってるだろう?」

「ふむ、じゃあ、殺るか?」

「いいぞ?」

そういうと青年はカードをポケットから取り出した

「なんだ?カードか?……八雲紫?……」

「さか!?!」

「気づいたのか?でも遅い!! 完全模範【境界操作】!!」

その能力は……

「別の対象の能力を使うことができるのか!？」

「そーだよ?よくわかったね」

「まあ、戦うまでもないな……」

「!!おま……え?」

なんせ、青年は後ろに現れた龍に殺されたからだ

「雑魚か……ただ、おまけが……ドラゴンか」

「goooooooooooooooo!!」

「ふん、少しは楽しませておくれよ?」

咆哮だけで吹き飛びそうになったのは秘密だぜ

戦い始めて一時間後

「純粋な身体能力のみでは勝てないな」

「gaaaaaaa!!」

「ブレスかな? 反盾【カウンター・マジック・シールド】!!」

ドラゴンが貯めるしぐさをしたから、

即座に魔法を反射する盾を創造した

「gaaaaagagagagagagaaaa!!」

「反射チートすぎ……」

ブレスは盾によって完全に反射された

ブレスは、ドラゴンの翼にヒットした

「それで飛べないだろ? 風纏【テンペスト】!!」

テンペスト……ダンまちのアイズの魔法と同じ感じ

「aaaaasdwexqde; dewmf i3 of moe; mk

m32 of mあ?」

「落ちやがれ…… 失墜【ダウンバースト】」

突っ込んできたから、

風の塊をお見舞いしてやった

「魔法行きまーす 風の導き手【ウィスパー・ハンド】!!」

「gaaaaaaa 破壊【デストロイヤー】」

「!?魔法が破壊された!？」

「g u u u u u u u u u u u u u u u u ……」

「ならば…!! 魔炎【神々を追放せし魔の焰】!!」

「g a g a g a g a g a g a g a g a g a g a z s b h n i x n w h  
d i c n r u i p v m t p b g v m h y i n o , y !!」

「お前のような蜥蜴のブレスなんざ効かん。こっちの魔法の方が強い」

魔炎がドラゴンのブレスを打ち破りドラゴンを魔炎が飲み込んだ

「終わった……」

「おにーさんすごいね!!」

「ん? 誰だ?」

後ろを向くと幼女がいた……何で幼女!?

「お前の名前は?」

「ありす!!ありす・まーがとろいと!!おにいさんは?」

「俺?俺の名前は……」

『能力自動発動……』

「こういう時に!!」

「レイだ……」

## 十二話

「ああ。また転移したのか……いい加減能力自動発動はなしにしようかな？」

「はあ……【反転】」

「これでいいはず」

「おお!? 久しぶりじゃな」

「お前か……」

「名前で呼んでとっておるじゃろう!!」

「すまんすまん、美夜」

「それでいいのじゃ」

「なにをしにきたんだ？」

「そうじゃな…… 星爆発【スーパーノヴァ】!!」

「馬鹿じゃねえの!? ここでやるなよその魔法!! 創造【スペース・ワールド】!!」

ほんとにやばい魔法を放ってきたので、

即座に能力で世界を創造した

「前から思うんじゃが……創造神に名前変えた方がいいんじゃないの？」

「いやだね……なるなら破壊神の方がいい」

「そうか…… 光線【ナパーム】」

「だつてかっこいいじゃん 魔炎【神々を追放せし魔の焰】」

熱光線を魔炎で打ち消した

「相変わらず厄介じゃのう 魔炎【神々を追放せし魔の焰】」

「おお!? 使えるようになったのか!? ……まだ慣れてないのか……ならば…… 爆発【バースト】」

魔炎の雨を、「バースト」の爆風で範囲外に移動した

「相変わらず、術の組み上げる速度が速いのう…… 風撃【ウインドブレス】」

「吹っ飛ぶとやばそうだからな!! 魔力【魔力障壁】」

風を全て魔力障壁で防いだ

「今回は勝ちたいのう…… 超爆発【エクスプロージョン】&妖術【妖力障壁】」

「!!これは、ヤバい!! 概念【強制削除】!!」

完全に森羅万象を消滅させる魔法を使い、エクスプロージョンを削除した

「!!なんじゃその魔法!!ズルい!! 熱光線【クリムゾン・ノート】」

「嫉妬でバンバンやばい魔法を放つな!! 白線【白色破壊光線】!!」

お互いがお互いの術を打ち消した

「ほんとにつよいのう!! 爆轟【デトネーション】」

「また、爆発魔法か…… 無効【マジック・キャンセル】」

魔法を無効化した

「おぬし……強すぎじゃよ…… 獄炎【灼熱地獄】」

「チツ……めんどくせえ魔法を…… 凍結【アブソリュート・ゼロ】」

地獄の熱を一瞬で無効化した

「ハハハハ!!落ちろ! 禁忌【ソロモン】!!」

「この魔法は……!! 移動【テレポーション】!!」

時空を歪ませ万物のあらゆる抵抗を無視して分子レベルで破壊する魔法である。

とんでもない魔法だ。

「終わりじゃ!! 黒き焰【ダーク・オブ・インフェルノ】!!」

「ふん 妨害【術は発動できないぜ☆】!!」

「な!?発動できないじゃと!?」

「終わりだー(棒) 天雷【ヘブンスサンダー】!!」

「あふん……」

空から雷を落とし、気絶させた

「やっと終わった〜」

## 十三話

「やっと終わった……」

「次元移動【テレポーション・零】」ヒュンッ

やっと戻ってきた……

よーし……

術式を組み上げて……

「久しぶりの登場だぞー————召喚【もこたん】!!」

魔法陣が出てきて、そこからもこたんが召喚された……

空中に

「グベツ……」

「やべっ……死んじやった……」

「空中から召喚するのはやめてくれ」

「生き返った……それと、無理だな」

「……」

「ん? どうしたんだ?」

「」

「いやな予感がするんだが……」

「ああああああ!! ウザイ!!」

「おいおい……そうなに叫ぶ……ぐべらっ……」

もこたんに殴られた

「ふん!!」

「いったいな〜」

「お前のせいだろ」



満月く

「むにやむにや……………ふわくああ……………」  
「ん？……………なんかいつもよりも体が軽く感じる……………満月だからか？」

「鑑定……………あれ？鑑定!!鑑定!!」

「鑑定が使えなくなってるのか……………あれを使うか」

「[ステータス強制開示]」

—————

レイ（神河 明人） 状態：神祖の吸血鬼化

Lv. ERROR

力：ERROR

耐久：ERROR

速度：ERROR

器用：ERROR

妖力：ERROR

魔力：ERROR

神力：∞

能力

《血液を操る程度の能力》

《血液を創造する程度の能力》

《蝙蝠になる程度の能力》

《森羅万象を削除する程度の能力》

《限界値を操る程度の能力》

《ありとあらゆる物を停止させる程度の能力》

《程度の能力》

《血を吸った者を眷属にする程度の能力》

《能力を与える程度の能力》

《森羅万象を創造する程度の能力》

《ありとあらゆる物を複製する程度の能力》

「神祖の吸血鬼？何それ？」

「能力変わりすぎだろう……」

「適当に能力使うか」

「ものじゃないが、満月の状態で【停止】!!」

三時間後

「ほんとに停止させるとは……」

「強すぎじゃね……？」

「……面白いことを思い付いた!!異世界人を転生させよう」

「空間創造」

「……これで転生させるため空間の完成か」

「さて……魔法陣起動」

「この魔方陣は異世界人を呼ぶための物だ」

「うおっ……ここは……?」

「成功か……」

「お前は誰だ?」

「私か……私の名前はレイだ。そして、神祖の吸血鬼だ」

「き、吸血鬼?……て、神祖?てことは神じゃん」

「そうだよ」

「なんで俺はここに?もしかして死んだとか?」

「ああ、お前は死んでるよ」

「……ほんとに死んでるのか?まさか神様が間違つて……」

「そんなミスをするわけがないだろう……すでに死んだ者の魂を連れてきただけだ」

「じゃあ、俺は地獄行きですか?」

「いやいや……君を異世界に転生させてあげようと思つてね」

「何で?」

「何でか?そんなの面白そうだからに決まつてるだろう」

「そうか……特典とかはあるのかな?」

「あるぞ?欲しいか?」

「当然だろう」

「じゃあ、クジ引き方式で」ぽんっ

「なんでやねん」

「え?そっちの方がいいじゃん……」

一等・《ベクトルを操る程度の能力》+《物質を複製する程度の能力》  
+《演算速度を加速させる程度の能力》

二等・《霊剣術を使えるようになる程度の能力》+《霊術を操る程度  
の能力》

三等・《剣術を扱う程度の能力》+《魔法を使う程度の能力》

四等・《別の相手の能力を劣化状態でコピーする程度の能力》

五等・《投げたものを命中させる程度の能力》

六等・《治癒力を高める程度の能力》

七等・《どんな事が起きても無表情でいられる程度の能力》+《コ

ミユ障になりやすくなる程度の能力」

八等：《全能力値を若干上昇させる程度の能力》

九等：《指定した対象が転ぶ程度の能力》

十等：《お腹が空きやすくなる程度の能力》

十一等：《反応速度を上昇させる程度の能力》＋《反射速度を上昇させる程度の能力》＋《思考速度を加速させる程度の能力》

ハズレ：パン一個＋水入りペットボトル一個＋銅の剣一個のみ

参加賞：《神祖の吸血鬼の加護・弱》

「……」

「どうした」

「ハズレよりはずれっぽい能力があるぞ……」

「ハハハハハ!!」

「笑ってごまかしたな……」

「一回のみだぞ」

「そんなのわかってる」

「回せ」

「よし!! やってやらあ!!」ガラガラッ

ポトン

「この色は四等か……チツ」

「よっしやあ!!……ん? 今舌打ちしたな?」

「していないしてない……じゃあ、送るよ」

ポーン・ション・零」

「うおっ……」

術構築 次元移動「テレ

## 十四話

「いや、まさか異世界転生を実際にさせる側とは……」

「面白いね……そろそろ解除しないとか」

彼は、能力で満月のまま停止させていた

”解除”

解除したが、まだ満月のままだった

「いきなり戻ったりなどはしないか……」

「この空間からとりあえず出よう…… 術式構築 詠唱破棄 次元移

動【テレポーテーション・零】

ヒュンツ。……

「おおう……まさか、ベットのの上に転移するとわね」

イメージしてたのは、家の入口のはずなのだが……

ミスったのかな？

まあいいか……取り敢えず寝よう

「あ、風呂に入るの忘れてた……まあ、明日でいいか」

主人公のステータス（現時点）

レイ（神河 明人）

L v . 4 3

力：4 3 0 0 0 0 { + 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 }

9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 }

耐久：430000 {+9999999999999}

99999999999999999999999999999

速度：860000 {+99999999999999999999999999999}

99999999999999999999999999999

器用：430000 {+99999999999999999999999999999}

99999999999999999999999999999

灵力：103826

妖力：ERROR {+99999999999999999999999999999}

99999999999999999999999999999

魔力：100032 {+99999999999999999999999999999}

99999999999999999999999999999

神力：100019 {+∞}

能力

《ありとあらゆる物を鑑定する程度の能力》

《全てを無効化する程度の能力》 (転生特典)

《森羅万象を反転する程度の能力》 (転生特典)

《ありとあらゆる物を召喚する程度の能力》 (転生特典)

《剣術を扱う程度の能力》

《体術を扱う程度の能力》

《魔法を使う程度の能力》

《森羅万象を破壊する程度の能力》 (能力反転)

《血液を操る程度の能力》

《血液を創造する程度の能力》

《蝙蝠になる程度の能力》

神祖の吸血鬼時の能力

《血液を操る程度の能力》

《血液を創造する程度の能力》

《蝙蝠になる程度の能力》

《森羅万象を削除する程度の能力》

《限界値を操る程度の能力》

《ありとあらゆる物を停止させる程度の能力》  
《程度の能力》  
《血を吸った者を眷属にする程度の能力》  
《能力を与える程度の能力》  
《森羅万象を創造する程度の能力》  
《ありとあらゆる物を複製する程度の能力》

-----

「ふわ〜ああ……ああああ〜んん〜んん〜ふう……」

「すごいあ……」

「うわあ!?! 空斬【テイメンション・スラスト】!!」

「のわあ!?! あ、危ないでわないか!?! 何をするんじや!?!」

「……ん? お前か……どうやって入ったんだ……」

「さあ? おぬしは我がどうやって入ったと思うんじや?」

「テレポーターション」

「む………そう簡単に当たると面白くないの  
う」

「一度だけ家に入れたことがあったからな」

「よく覚えとるな……40年前位じやろ」

「お前こそ……テレポーターションは、完全にイメージ出来てないと  
使えないんだぞ」

「……そ、そうじゃろ？……偶々覚えてたんじゃよ」

「ふくん……今日は仕事はないのか？」

「すでの終わっとるぞ。昨日は何故か満月のまま動かなかったから  
の」

「……そうか」

「最近思ってるのが……おぬし……雰囲気が変わったのう」

「マジで？（吸血鬼化のせいだろうか？）」

「うむ。何というか神々しくなったのう」

「そ、そうか……実は……俺、半神半吸血鬼になったんだよ」

「……嘘じゃろ？」

「マジです」



## 十五話

「ぐー……ぐー……ぶえつくしゅん  
!!」

「あーさみーよー」

今の季節は冬だ

それに、外は猛吹雪だ

最悪である

「創造した弁当でも食うか」

弁当は最高だ

料理を作らなくて済む

……料理自体は滅茶苦茶得意だが、食材がない

だったら食材を創造すればいいって？

それじゃあ、つまらないじゃないか

「頂きます」

因みに、今日の弁当の中身は”焼肉弁当”だ

……肉はあまり好きじゃないが……な

「ごちそうさまでした」

案外腹にたまったな

「お腹いっぱいだし、運動したいが……」チラッ

猛吹雪だお？

「外に行く気も失せるな……」

「でもなく……転生者送ったし面白い事とかはもうな……」

ドガアアアアアアアアアアアアン!!

「……誰だ？この山に突っ込む奴なんて、文か美夜くらいだぞ……」

最初はあの二人のどつちかかな？と思っただけど、気配と妖力の質が違うからあの二人ではない

「めっちゃめっちゃ嫌な予感がするのだが……」

何でこうも面倒ごとが転がってくるのか……

「はあ……面倒が行くか」

直ぐに装備などを着て、剣を腰に差し、耐・冷感魔法を使い……

「じゃあ、行ってきます」

外に出た……

……のは、よかったのだが……

「おい、何をしている」

「……」

家の目の前に半径十メートルくらいの穴？みたいなのができていて、その中心には鬼の少女が気絶して倒れていた

「はあ……しようがない運ぶか」

そして、また家に戻った

「(せっかく装備整えたのに) はあ……… ”魔法解除”」

耐・冷感の魔法を解除した  
これは、体を温める魔法だから、  
このまま家に入ると暑くて死んでしまう

「ふう……」

途中こけそうになって……あの時はビビった  
ただまあ、ベットにちゃんと寝かせられたしいいか  
今の一言だけ聞くと、赤ちゃんを寝かせるみたいな言い方だな……  
そんなことは置いといて……

「ん？そういえば……」

実は家に入る前に別の妖怪（多分、射命丸文）がいた  
家に入った瞬間、

移動したから恐らく、  
前に上げたカメラで撮ってたんだろう

「もし、新聞に載せたら焼き鳥にしてやる」

前にもこういうことがあって、一回焼き鳥にしたのだが……  
「まだ懲りてなかったか……」

新聞に載せたら

これは、死刑だな……

がさがさ……という音が鳴ってる、てことは起きたのかな？

「んみゆう……ふわぁあ……ふう……」

「起きたのか」

「え……」

声をかけた瞬間に動きが止まった

……そりゃあそうか知らない人から声をかけられたんだから

「ど、どうして……!?!」

「どうして、て……」

昨日のことを説明中

「ああ……とある一人の鬼に喧嘩売ったんだけど……負けちゃってね」

「そして、その鬼に吹っ飛ばされたと」

いや、すげえな……さすが鬼だ

妖怪の山はそんなに遠くはないとわいえ、ここまで吹っ飛ばすとは

……

「あ、私に乗ってませんでしたね……私の名前は樹希 鬼花です」

「すごい名前だね……俺の名前はレイだよろしく」

## 十六話

「行くよ!!」

「ああ、来い!!」

お互いに拳をぶつけ合う

「せやあ!!」

「シッ!!」

鬼花が回し蹴りを放ってきたので、

同じくこっちもまわしげ回し蹴りで対応した

「ッ!!……鬼と同等クラスの身体能力を持っている、というのは嘘ではないようですね」

「グッ……そりやあねえ。鬼の前で嘘をついたりしねえよ」

ここまで鍛えてようやく鬼と同等かよ……!!

「先に行かせてもらおうぜ!!」

「どんとこいです!!」

思いっ切り力を籠め殴った……が、受け止められた

その後すぐに、ぶん投げられた

「はあー」

「があ!!」

攻撃を防げなかった

空中にいるとやばいな!!

「つええ……さすが鬼だな……」

「フッフ……それほどでも」

吹き飛びやがれ!!

彼は、体に力を籠め思いっ切り地面を蹴り飛ばして加速した

そして、鬼を思いっ切り蹴っ飛ばした

「!!速いです……ね!!」

だが、相手が相手なのですぐ空中で体制を整え、こっちに向かって来た

「セイッ!!」

「……はあ！ 武技【フォース】!!」

一時的に身体能力の限界を解放する特殊な技術を使った

そして、鬼の連続攻撃をすべて防ぎ、思いつ切り鬼を殴り飛ばした  
「あぐっ………凄いい!!鬼の攻撃をすべて防ぐなんて……」

「まあね、こつちも鍛えてるもんで」

ドラゴンを倒したのがよかったのかもしれない

「その、強化の術はどうやってるんだい？」

「敵に教えるわけがなからう 《血液創造》& 《血液操作》」

手に血を創造して、その血の形を操り矢の形にして飛ばす

その数、100本

「その程度……!?!」

血の匂いも滅茶苦茶臭くさせた

「ヒットした」

「グッ……うえっ……」

かかった瞬間、動きが止まったので一瞬で接近して、腹に一発決めた

「ウグう……ず、ずるいぞ!!」

「ハハ……まあ、勝てればいいと思ってるんでね」

「ならば…… 【限界突破（アンリミテッド・ワン）】!!」

「チツ……強化系の能力か？ 威圧【吸血鬼様の怒り】&霊術【霊力解放】!!」

最初の術で妖力を全解放し、更に霊力も全開放した

その衝撃だけで、周りの木や植物が吹き飛んだ

「行くぞ!!」

「受けて立つ!!」

鬼が思いつ切り突っ込んできたため即座に魔法を構築した

「ぶっ飛ば!! 衝撃【ショック】!!」

「ッ!!……はあ!」

彼が生み出した衝撃波をジャンプして回避をし、

思いつ切り彼のことを殴り飛ばした

「グ……があ!?!」

彼は、思いつ切り吹き飛んで、三十メートルくらい飛んで木に激突して止まった

「はあ……やつと一撃目」

「詠唱破棄 移動【テレポーション】」

転移で鬼の近くまで飛んだ

「やってくれたな……」

「まあね!! やられっぱなしじゃくねく」

「チツ……行くぞ…… 拳技・応用・【縮地・偽】!!」

縮地（偽）で接近して、蹴り飛ばし……

「はあ!」

……お互いに打ち合った

「ふう……」

彼は、身体能力では劣っているかと思いきやこの状況は分が悪いと考え、即座にバックステップで回避した

「はあ!」

「ふん!!」

お互いに拳をぶつけ合う。その衝撃で山自体が揺れていた

「ふう…… 呼吸【全集中の呼吸】!!」

「!! 鬼滅の刃かよ!? 黒キ空間【ダーク・オブ・デイメンション】!!」

鬼は全集中の呼吸を使おうとしたが、彼の魔法で発動できなかった。

否、正確には発動できなかったわけではなく呼吸が出来なくなったため強制的に無効化されたのだ

「解除……ふう……魔力消費量がでかい魔法だな」

「かひゅー……かひゅー……」

「やべーやり過ぎた」

呼吸困難で倒れてしまった鬼

その鬼を部屋にあるベットに寝かせた

「今回は俺の勝ちだな。戦ったんだから山に戻っておくれよ? そういう約束なんだから」

## 十七話

「はあ……負けるなんて……」

「これでも鍛えてるんでね」

「……鍛えただけで鬼クラスまで強くなれるなんて普通にやばいよ」

「そうか？」

「じゃあ〜ね〜」

彼女は妖怪の山に飛んで行った

「じゃーね……」

ふう……そろそろあれの封印が解かれてしまうかな？

封印が解除されたら止めに行けばいいか

「……鍛えよう」

あいつに負けないために

「うん？視線を感じる………あの辺か？ 投石【ロック

シュート】 & 空破【ディメンション・ブラスト・付与】

手元に石を創造して、空間魔法を付与して思いつ切り投げた  
すると……

「キャツ……」ドスツ

「やっぱお前か八雲紫。何のようだ？」

「……ふう、貴方……分かってるでしょ？」

「西行妖……かな？」

「やっぱりわかっているじゃない。封印が解けそうだから……」

「わかっている分かっている……また、封印し直せばいいんだろ？」

「そうよ。」

「今すぐか」

「ええ」

「はあ……戦闘ばっかだよ最近 移動【テレポーターション】」



「……やばいな」

封印が解除されてる？

なぜ……？

……兎に角このまま放置はまずい

幽々子のため、

封印するためにも……

「弱らせる……か」

だが、そう簡単ではないだろう

異常なレベルの妖力があの木から漏れ出てる

「……ッ!!急ごう 術式構成 魔法効果上昇 一点破壊 集中 魔法

攻撃力強化……」

術式を組み上げながら、階段を駆け上がった

「すでに戦闘が始まってるか……」

見た感じこつちが不利だ

妖夢がケガしてる!!

治す前に……

「空間魔法・【ソロモン】!!……やっぱり発動しないか」

効かなかったため、取り敢えず妖夢を治すことにした

「———— 汝を癒せ【パーフェクト・ヒール】!!」

「はあ……はあ……はあ……あれ? 傷が消えてる。……あ、あり  
がとうございます」

「どういたしまして。取り敢えず……ん?」

西行妖の枝が一本だけ迫ってきてた

「邪魔、妖夢に手出しはさせん」

回避し、斬った

「思ったよりかてえ!!」

金属でも切ったかのようだ

「術式構築………完了!! 結界魔法・【光結界】!!」

妖夢に結界魔法を付与した

「妖夢行くぞ!!」

「はい!!」

「下がれ!! 無詠唱 ”ファイアー・アロー”」

自分の周囲に火の矢を生み出し、西行妖に向けて放った

「gooooooooo!!」

「枝を振っただけで消しやがったか!!」

「ふう……」

「大丈夫か?お前ら……休んで来い」

「……わかったわ」

「……ああ」

”物質創造” & 拘束【バインド】

物質創造で縄を創り、枝を何本か拘束した

「シッ!!」

左右から迫ってくる二本の枝を、

高速で半回転して、切り裂いた

「ッ……があ!!」

斬った直後に正面からも枝が来たが、

ジャンプして回避し、上からぶった斬った

「がはっ……」

空中に枝を伸ばしてきたが、

彼は、防御が出来ずそのまま直撃して吹き飛んだ

「……………ッこのままだとまずい」

「師匠!!」

「大丈夫だ!! —— ”再生加速”」

術で回復速度を上げて、即座に走った

「妖夢危ない!!」

妖夢に枝が迫ってきていたのだ

「大丈夫です!!師匠!! 靈劍術・二刀流・弐ノ型・【星砕き】!!」

背後に迫ってきていた枝を二本の刀を使い砕いた

「もう使いこなしてるのか……。負けてられんな!! 靈劍術・短剣・弐

ノ型・【星砕き】!!」

正面から来ていた妖力弾と枝を切り裂いた……いや、砕いた

「ツ……セイツ!!」

突然、目の前に現れた妖力弾を回避して木に攻撃を与えた  
「かった!? かすり傷くらいしか入ってねーじゃねーか!? ……一度下がるか」

妖力弾や枝を回避しつつ後ろに下がった

「妖夢大丈夫か!」

「はあ……はあ……はあ……だ、大丈夫です!!」

「霊力もうないだろ!!」

「クツ…… 霊剣術・二刀流・壺ノ型・【隴飛燕】!! ……霊力が足りない」

チツ……だから言っただろう

「移動【テレポーション】」

妖夢を強制的に転移した

「キャツ」

「———聖絶!!」

一時的に光属性の結界を張った

「ふう…… ” 霊力譲渡 ” 」

「はあ……はあ……あれ? 力が……」

「霊力を上げたからな」

## 十八話

「はあ……はあ……」

あれから一時間、西行妖をまだ倒せていない  
妖力はだいぶ減ったがこっち側の方が不利だ

何故なら皆体力と妖力と霊力が殆どなくなりかけているからだ

「はあ……」ステータス」

-----

レイ（神河 明人）

Lv. 49

力：490000

耐久：490000

速度：9800000

器用：490000

霊力：435 / 114837

妖力：991 / ERROR

魔力：494 / 104394

神力：984 / 108984

スキル（能力）

《鑑定》《無効化》《反転》《召喚》《剣術》《体術》《魔法適正》《創造》《破壊》  
《血液操作》《血液創造》《蝙蝠化》

-----

ツ!!……霊力、魔力、妖力、神力が残りすくねえ……

不味い……どうすれば……

……そうだ、能力を創造すればいいんだ

そうすれば……あいつを……

「チイツ……!!」

西行妖も怒っているのか、妖力弾などを放ちまくっている

「あああああ!!」

ステータスも足りない……足りない……

能力を作りたいが、頭も回らない……

「があ!!」

その時、妖力弾に当たってしまい吹き飛んだ

「…………グ………………………アア……………」

体が痛い……また死ぬのは嫌だなあ

その時、何故か幽々子が西行妖の方へ歩いているのが見えた

「何を……する気……だ……?」

「……………」

まさか、自分の命を……

やめろ!!

「やめ……………ろ」

「……………」

幽々子はナイフを取り出し、自分の手首を少しだけ斬り……

「じゃあね」

その後、西行妖は封印された

西行寺幽々子を失って……

「まただ……また死なせてしまった……誰かを守れる強さを……とか  
言いつつ、何も守れてないじゃないか……」

「そうだ、守るためにも能力を創造しよう。」  
”創造”

彼が創造した能力は……

-----

レイ（神河 明人）

Lv. 49

力：490000

耐久：490000

速度：98000000

器用：49000000

霊力：114837 / 114837

妖力：ERROR / ERROR

魔力：104394 / 104394

神力：108984 / 108984

スキル（能力）

《鑑定》《無効化》《反転》《召喚》《劍術》《体術》《魔法適正》《創造》《破壊》  
《血液操作》《血液創造》《蝙蝠化》《復讐者》《限界突破》《強制解



放

復讐者

説明：死んでも復活する能力。死ねば死ぬほど強くなれる。

限界突破

説明：身体能力を一時的に三倍に引き上げる。使った後は、体に激痛が走る

強制解放

説明：神祖の吸血鬼としての力を一時的に解放する。代償は死ぬこと

## 十九話

町へ

「ん？なんだ……」

視線を感じたため、そちらを向くと……

「やあやあ!!リーダーさんよ!!」

「……」

なんだこの……なんていうか……この……モブ感……

「何のようだ？」

「リーダーさんには死んでもらうぜ!!」

「……」鑑定」

モブ・キャラ（人型）

Lv. 0

力：100

耐久：100

速度：10000

器用：100

妖力：1000/100

スキル（能力）

《能力ランダム書き換え》

シャツフルだと？

滅茶苦茶嫌な予感が……

「ぎゃはははは!!今日で終わりだ!!《シャツフル》!!」

「……ん？なんか起きたのか？鑑定」

レイ（神河 明人）

Lv. 49

力：490000

耐久：490000  
速度：980000  
器用：490000

霊力：114837／114837

妖力：ERROR／ERROR

魔力：104394／104394

神力：108984／108984

スキル（能力）

《絶対回避》《無効化》《反転》《召喚》《剣術》《体術》《魔法適正》《否定》《加速支配》《血液操作》《血液創造》《肉体変化》《復讐者》《万物操作》《終焉の焰》

一部変わっているが……

ん？鑑定消えたのに何で鑑定使えてるんだ？

……ま、まあいいか!!ご都合展開ってことで!!

「能力が糞雑魚にでもなったか？ぎやはははは!!」

「……寧ろチート化してますが」

「ちーと？がなんだかはしらねえが、とっと死ね!!」

言い終えたとたん、一気に迫ってきた

「甘いんですよ……」

遅い……遅すぎる……

現代の物で例えるなら、スポーツカーレベルの速度だ

だが、俺にとつちや——

「遅すぎる相手にならん、死ね”血槍”」

自分の指を少しだけ切り、そこから血を出して操り、槍の形に変えた

そして、その槍を思いつ切り投げた（足りない分は、血液創造を使った）

ぶしやああ……

「……いくら何でもやり過ぎたか？」

血の槍が頭に当たり、吹き飛んだ

「まあいい。」

だが、よほど腕に自信があったのか？

あれレベルなんて何回も戦ったことがあるが……

このパターンよくあるのだが……

「おっと……あぶねえな」

右斜め後ろから矢が迫っていた

咄嗟に小さい血の盾を作り防いだ

「ほんとに来るとは……」

暗殺者かな？或はそういう系の能力を持っている妖怪か……

「矢を放つまで一切気配をつかめなかった……。やっぱりそういう系の能力を持っているのか」

チツ……また気配が消えた

面倒な敵だ

……範囲攻撃を放つか

”侵食する闇の波動”

自身から半径三メートル位に黒いオーラが出た

「これで近づけんだろ」

ナイフなどを投げてきても、

侵食して、俺には届かないからな

「出てこい……」

そう言うときいつは出てきた

「やあ、山の主さん？」

「まさか鬼だとは……予想外だよ……鬼はそんな姑息な方法で来る種族ではないと思っていたが……」

「いやいや、あいつらがそうなだけだ」

「やるか？」

「ああ、いいぜ」

来る!!

”魔法解除!!ガチ勝負だぜ”

「……ふん”暗黒物質創造”形状変化・剣”」

「……ふん”暗黒物質創造”形状変化・剣”」

「……ふん”暗黒物質創造”形状変化・剣”」

白色の物質を創造し、万物操作で形状を変えた

「はあ!!」

## 二十話

一時間後〜

一時間ずーーーーーーと死闘をして、ようやく決着がついた

「ハア……ハア……」

「大したことがないな」

最後に立っていたのは、鬼……ではなく不老不死で半分吸血鬼でありこの作品の主人公であるレイだった

「じゃあね」

軽く剣を振り、首を斬り落とした

「はあ……鬼がこれくらいだから神とは戦いたくないな……」

もし、神と戦うことになったら、神祖の吸血鬼の状態じゃないと絶対勝てん

あれ？そう言えば……

「俺、何の為に町に来たんだっけ？」

何だっけ？……そうだ、服を買いに来たんだった。

俺センスがないから、創造じゃあ、ダメなんだよね……

あ、でもセンスがないからそもそももの話、俺が服屋に行ってもダメなんじゃ？

「……どうしよう」

今すぐ呼び出せる人なんて、もこたんくらいだが……

あいつはなく……

「つーか、もう暗くなってるし帰るか 移動【テレポーターション】」

はあ……もう少し早く来ればよかった……

「ただいまー」

はあ……彼女でも欲しいなく  
相変わらず寂しいわ、一人暮らし

「今日は風呂入って寝るだけだし、楽だな」  
くお風呂中く

「はあ……スッキリした……」

風呂はいつ入っても最高だぜ  
「はあ」

寝室のドアを彼は開けたすると……

「すう……すう……」

……ナンデ？

ナンデ？

何でもこたんがいるんだよ!?

「……は!? 起こさないと」

もこたんの身体をゆすつた

「おきてもこたん!!」  
起きない

今度はもう少し激しくする

「妹紅起きろ」

ベットがギシギシ音になるまでゆすつた

「うん? ……ん? 何でレイがいるんだ?」

「何でって……俺の家だからだ」

「……」

「どうやって入ってきたのか全然わからないのか」  
「……」こくつ

か、かわいい……

何だこの生き物は……あ、もこたんだった

「じゃあね」

「はい」

もこたん!!

じゃくねく!!

現在のステータス

レィ (神河 明人)

Lv. 64

力 : 640000

耐久 : 640000



速度：1280000  
器用：640000

霊力：1194473 / 1194473

妖力：ERROR / ERROR

魔力：184926 / 184926

神力：109984 / 109984

スキル（能力）

《絶対回避》《無効化》《反転》《召喚》《剣術》《体術》《魔法適正》《否定》《加速支配》《血液操作》《血液創造》《肉体変化》《復讐者》《万物操作》《終焉の焰》

## 二十一話

「そろそろ未来の世界に転移するか」

幻想郷に行きたいし、

俺が送った転生者にも会えるだろ

それと、この山もきれいになってればいいな……

鬼とか天狗、不老不死などと戦いまくったせいでこの山すごく凸凹

なんだよね……

「あ、そう言えば俺が送った転生者ってどこに生まれるんだ？」

指定するのを忘れててどこに転生するのか分からん……

完全にやらかしたぞ

「どれとどんな転生特典を与えたっけ？」

えーつと……紙に書いておいたのだが……

「あつたな」

四等：《別の相手の能力を劣化状態でコピーする程度の能力》

「ああ、チート（笑）の能力か」

どれくらいのレベルでコピーをするのかという……

そうだなあ……

例えば、俺の能力の《血液操作》とかは劣化状態だところなる

《血液を一センチメートル位動かす程度の能力》だな

クツソ弱い

もし、それを極めても精々三センチくらいまでしか動かせない

それに、触れてる血しか動かせないので正直言つて糞だ

まあ、塵も積もれば山となるって言うし

いろんな人の能力でも複製しまくれば、だいぶ強くなるだろ

……多分

まあ、ないよりはましだな

「さて、加速させようか」

自身を除くすべての時間を加速し始めた

余談だが、加速中はレイの姿を見ることはできない

加速レベルが一定を超えると、なぜか彼の姿を見れなくなるのだ

何故だかは分からないが……

????????????????????

「んんん………はあ……」

突然だが、俺の今世の名前は我塚 月秋だ

今世つてとこで分かったと思うが、俺は神祖の吸血鬼様に転生させてもらった運がまあまあな転生者だ

四等つて……せつかくだから一等を当てたかったぜ……

「ねっむ……」

今いるところ？

俺の部屋だが……

「顔洗いにいこう」

ぎしぎし……

ベットから降りると床からすごい音がなった

この家は物凄く古くて

確か築五百年だったか……

先祖代々引き継いでるんだよな……

この家は謎なんだよな……

倉庫に刀とか陰陽師とかが使いそうな呪符っぽいのだってあるし

「まあ、いいや」

取り敢えず顔を洗いにいこうか

洗面所は一階にある

あ、この屋敷は三階建てで俺の部屋が三階の端っこなのだ  
洗面所は一階の端っこ

めんどくさい構造なのだが、

文字で教えるのも限界があるのでここらへんでいいか

☆☆☆☆☆☆☆☆

着いたか。

クツソ寒いなく

古いせいで、この屋敷所々穴空いてるんだよな……

それに、窓だつてちゃんと閉まらないで僅かに空いてたりするから  
この屋敷のどこにいても（風呂場をのぞく）冬は寒いんだよね

まあ、夏の場合は逆に暑すぎて毎年暑さで死にかけるんだけど……

☆☆☆☆☆☆☆☆

部屋に戻ってきて、ベットに座り

まだやってないことがあるのを忘れていた。

ステータスの確認だ

なぜ日二本なのにステータスが見れるんだよな……

大方神様のおかげだろう

「さて、いつも起きてすぐ見るのだが……。今日は少し見るのは遅れ  
たが誤差だろ」

三十分ぐらい誤差のうちに入るだろう……。うん。

さて、今日も見ろぜ!!

「ステータス」

—————

我塚 月秋

力：17

耐久：14

速度：19

器用：18

霊力：19／19

スキル（能力）

《劣化複製》《成長補正・弱》

加護

神祖の吸血鬼の加護・弱 L V. 1

そう表示された

相変わらず低いな……

レベル性の方がやる気が出るのだが……つと彼は心の中で愚痴る

劣化複製は《別の相手の能力を劣化状態でコピーする程度の能力》

の略だろう

成長補正・弱は恐らく加護に含まれているスキルだろう

成長補正スキルがあるのに全然ステータスが増えない

それに、霊力が良く分からない

だから生まれた時からずっと19のままだ

その時、外から雷が落ちたかのような音がなった

ん？天気は晴れだったはずだが……

さつき洗面所から部屋に戻ってきてる途中窓から外を見たけど、晴れていてこの屋敷が立ってるのが山の頂点だからちつと暖かく

晴れててもこの屋敷が立ってるのが山の頂点だからちつと暖かくならないのだが……

取り敢えず、落下したところに行ってみよう

「さて——何が落ちてきたのかな？」

山の頂点に住んでるせいであまり友達と遊んだりできなかつたし、日まで暇で仕方がないんだ……

何でもいいから面白いことが起きてくれよ？